教職を履修する大学生の知的障害児童・生徒とのボランティア活動を通じての障害および支援へのイメージの変化

○伊藤かおり
（帝京平成大学　児童学科）

KEY WORDS: 教職を履修する大学生　知的障害児童・生徒　ボランティア活動

（目的）

教職を履修する大学生にとって、通常の学級への指導のイメージは湧きやすいが、障害児童・生徒への指導・支援についてはイメージがしにくく学修への内発的な志向性が高まりにくいという課題がある。これは特別支援学校の教員を志す大学生にとってもその初学時には共通する課題であるといえる。そのような背景の中、ボランティア活動を通じて実際に障害児童・生徒らと関わることは、初学者である教職を履修する大学生の障害児童・生徒らへの指導・支援のイメージの醸成の一助となると考えられられる。本研究は、数量的な指標から、ボランティア活動による関わりが障害児童・生徒に対する指導・支援のイメージに変化をおよぼすか否か検討することを目的とした。この変化を明らかにすることは、教職初学者の内発的な志向性を高める方法のひとつとして、障害児童・生徒と直接関わる機会がもつ有用性を提示する上で意義があると考えられる。

（方法）

調査協力者　知的障害関連の科目を履修する１、２年生でボランティア活動に参加を希望した学生 10 名。

調査時期　2017 年 05 月。

評定用紙　SD 法の評定用紙として、Osgood et al.（1957）により重要とされる３種類の形容詞（評価、力量、活動）をあらわす形容詞対を評語として用いた。

手続き　知的障害児童・生徒とのボランティアの活動の参加前と参加後に一斉に実施した。調査協力者に評定用紙を配布し、「評定対象語を見て、頭に浮かんだ感じを各尺度で評定します。５段階の評定であり、各評語に対応する短い縦線を〇で囲んでください。あまり考えすぎずに印象でつけてください。」という教示を与えた。

倫理的配慮　所属機関による倫理審査で承認を得た。

(結果)

大学生の知的障害児童・生徒とのボランティア活動参加前と参加後のイメージについて、左側の評語から右側の評語にむけて(１)、(２)…、(５)と配点し平均値と標準偏差をもとめた（Table 1)。

Table 1　大学生の知的障害児童・生徒とのボランティア活動参加前と参加後のイメージの平均と標準偏差

	参加前		参加後	
	M	*SD*	*M*	*SD*
評価				
1　立派な―ひどい	2.40	0.80	1.60	0.66
2　役立つ―役立たぬ	1.80	0.40	1.20	0.40
3　よい―わるい	1.80	0.60	1.30	0.64
力量				
4　大きい―小さい	2.70	0.90	1.70	0.64
5　力のある―力のない	3.00	1.10	1.90	0.83
6　強い―弱い	2.80	1.08	2.10	0.83
活動				
7　速い―遅い	3.50	0.81	2.40	0.66
8　騒がしい―静かな	2.50	0.81	2.30	1.00
9　若い―老いた	1.90	0.70	2.00	0.89

続いて、Table 1 の平均値をもとに SD 法プロファイルを作成した（Figure 1)。

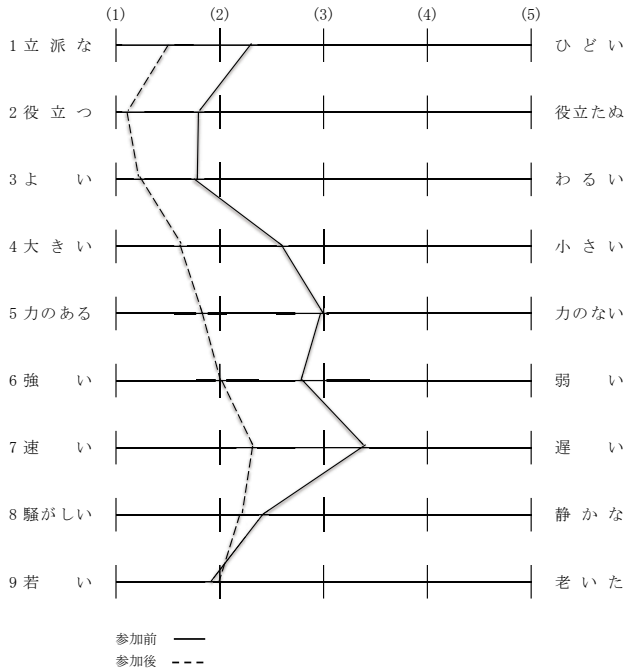

Figure 1　大学生の知的障害児童・生徒とのボランティア活動参加前と参加後のイメージの平均値にもとづく SD 法プロファイル

（考察）

Table 1 および Figure 1 に示したとおり、教職を希望する大学生の知的障害児・生徒とのボランティア活動のイメージはその参加前と参加後で変化がみられた。それは、「若い―老いた」以外の形容詞対において共通して肯定的な意味をもつ形容詞の側へ変化していた。このことは Osgood et al.（1957）による形容詞の分類から考えれば、「評価」と「力量」のイメージが変化したといえる。また、「評価」に分類される形容詞対はいずれもほぼ同程度の変化であるといえるが、「力量」に分類される「力のある―力のない」と「活動」に分類される「速い―遅い」においては、その他の形容詞対に比べて変化が大きいことがみてとれる。この変化が具体的に何を意味し、どのような理由によるものであるのかは課題として残るが、これを明らかにすることは、実際に障害児童・生徒と関わりをもつことによる大学生への教育的効果を知り、それを教育に反映していく上で有意義であると考えられる。

（文献）

Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. (1957). *The measurement of meaning*. Urbana, USA: University of Illinois Press.

(kaori ito)